

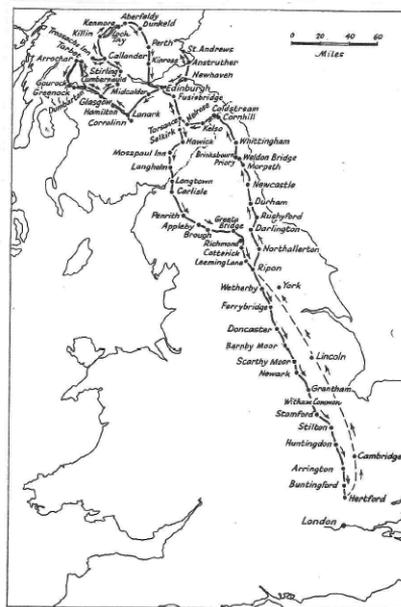
マルサスのスコットランド旅行記等

柳田芳伸

訳者序

ここに訳出を試みるのは、Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1966), pp.222-25, 257-68の全訳で、マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) が1810年に作成した『経済学覚書』(一以下、『覚書』と略記)とマルサス夫妻が1826年6月中旬から7月26日にかけて書き残している『スコットランドの旅行記』(一以下、『旅行記』と略記)とである。『覚書』はその習作年代から言えば、先に置かれるべきではある。けれども内容の大半がスコットランド地域を対象としているゆえ、本訳ではあえて後ろに回した。また『旅行記』〔図1.参照〕については、この旅行に帯同、随行したハリエッタ (Harriet

図1. マルサスのスコットランド旅行の順路



(注) Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R. Malthus*, 1966, p.259より。

Malthus, 1777-1864) 夫人が旅路で綴った日記誌である、J.M.Pullen & T.R.Parry.ed., *T.R.Malthus: The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2004), Vol.2, pp.216-40の翻訳を適宜に並置、補充して、本旅行の実態を可能な限り詳細に描き出そうと努めている。マルサス夫妻が別々の行動をとった日（7月14日）も散見されるものの、大抵の場合には同行し、同席していたと推知されるからである。しかしながら本訳から19世紀初頭のスコットランドの実相が豊かに彷彿として、浮かび上がってくるわけではない。これは他の労作に譲られるべきであろう¹⁾。本序では、あくまでも、『覚書』や『旅行記』における断片的記述をマルサスの他の著作（とくに『人口論』）の当該部と照合してみる時、その内実はどのように読み解きうるのか、こうした論点に絞り込んでいきたい。

さて、マルサスがスコットランドの地に足を踏み入れたのは、本旅行で少なくとも3回目と目算される。最初は、1810年の夏で、オッターの兄エドワード(Rev. Edward Otter, 1764-1837) がボサル・ウィズ・ヘブヴァーン教区の牧師を務めていたノーサンバーランドを經由しての旅であった²⁾。『覚書』はこの時の断片的記録に他ならない。管見の限りでは、続く2度目の立ち寄りには1817年のアイルランドへの旅行の際にグラスゴー、グリーノックを通過した時のこと³⁾と推察される。そして3度目が今般の周遊である。周知のように、本歴遊は1826年1月6日付の親友ジェフリー (Francis Jeffrey, 1773-1850) からの懇書に端を発している。すなわち、ジェフリーはその中で、「マルサス婦人を慰撫されて、この夏、クレグ・クルーク邸に2, 3週間滞在されませんか。小生の方は、7月中旬以降大いに時間があります。またご家族連れの出で、貴方方を飽きさせるようなことはないかと存じます。ご夫婦の身に情け容赦なく降りかかった悲痛な思いに接しても驚くことはありませんので。」⁴⁾と認めているのである。それゆえ、今回遊も前年の大陸旅行と同様に、夭逝した愛娘ルシー (Lucy, 1807-1825) を悼んでのマルサス家4人の傷心旅行であったと言っても大過ないであろう。

とりわけ、長男のヘンリー (Henry Malthus, 1804-82) の痛嘆は深甚で、心身に変調をきたしていた（7月4日、7月21日）。ところが、存外、ヘンリーの仔細は余り知られていない。それゆえ、本論から大きく脱線してしまうけれども、ヘンリーに一瞥くれておきたい。ヘンリーはこの時21歳に達していた。彼は1824年にケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学し、代数に論理哲学を適用し、1818年にロンドン王立協会の会員となり、かつ1826年にはワイムズウォルド教区の司祭となったピーコック (George Peacocke, 1791-1858) から個別指導を受けた。そして

1829年に文学士を取得すると共に、従兄のブレイ (William Bray, 1804-79) の後任としてサリー州のオークウッドの牧師補職に叙任された。その後、1832年にデボンのポウギル教区の司祭となり、1837年にはサセックスのドニントン教区の司祭に転じ、併せて1836～60年の間、サリー州のエフィンガム教区の司祭を兼任し、エフィンガムの地でその生涯を終えた (享年78歳)。その間、デボンの気候は彼の体調に適し、1836年6月16日にオッター (William Otter, 1768-1840) の長女ソフィア (Sophia Otter, 1807-1889) と結婚するも、子供に恵まれることはなかった⁵⁾。

ところで、上述のジェフリーからの書面からは、『旅行記』を判読していく上で見過ごせない手掛かりを得ることができよう。それは、マルサスが来駕してくるのに当たって、ジェフリーがこれまで築いてきた人脈を活用して、マルサスに紹介したいお歴々を選定し、かつその各人と対面できる日時や場所の設定に心を砕いていたという経緯である。この行き届いた手配の甲斐あって、マルサスは短時日のうちに実に多数の名望家から知遇を受けることができたのである。

幸いにも、『旅行記』に登場してくる大半の高士に関しては、ジェームズ (Patricia James, 1917-1987) 女史が逐一行き届いた月旦を付してくれている⁶⁾。蛇足は不要であろう。ここでは、訳者の知的興味に沿っての抄訳にとどめたい。マルサスは6月21日のマレーヤラザフォードとの対面を皮切りに、アロウェイ、マッケンジー、クランシュトゥン、コーバンと相次いで顔見知りになっていく。ほぼ全員が小柄なジェフリーと同様に「功を成したウィッグ派の法律家 (successful Whig lawyers)」であった。その他、マルサスが本旅行で面識を得た面々は多士済済である。それゆえ、一網打尽というわけにはいかない。それでも、聾啞に関する古物収集家であったウッドや、スコットランド南西部のエア州にある植物苑(ランファイン・ハウス)を受け継ぎ、かつ化石収集家でもあったブラウンとの対話 (6月26日、7月2日) がかつて植物採集家でもあったマルサス⁷⁾の興味をさぞかし覚醒させたことや、あるいはまた、ジェフリーの母方の叔父であったモアヘッド (William Morehead, 1737-1793) はジェフリーにウィッグ的気質をもたらした高潔な人物⁸⁾で、かつマルサスが7月18日に出会ったモアヘッドの父であったことなどを忘失してはならないであろう。視線を経済学者に転ずれば、マカロクとの初会はジェフリーの御膳立てによるものと想定される⁹⁾けれども、チャーマーズやステュアートとの対面 (6月29日、7月8日) はマルサスの意向を反映してのものであろう。チャーマーズとは1821年9月¹⁰⁾以来の再会であり、またステュアートとの拝眉はマルサスからの打診の賜物¹¹⁾と想定される。1809年以降、ステュアートは豪華なキニール・ハウス (その所在はスコットランド東中部のボーネスの西) に居を構えていて、わざわざトロサッ

クス・インまで足を運んでくれたものと解される。

ジェフリーは、マルサス達が安んじてスコットランド周遊を楽しめるよう企画してくれてもいた。すなわち、ジェフリー一家は1822年の10月から1838年に至るまで、ターベットやアロッチャーに程近く、ローモンド湖の畔にあったスタッキング・ハウスで2～3週間の保養を毎年のように満喫していた。このハウス自体は851エーカー（年間814ポンドの価値）の土地を持ち、1812年にコメット号の蒸気機関を作ったネーピア（David Napier, 1790-1869）に協力してもいたマクマーリッヒ（Jas M'Murich）の所有であったけれども、氏の好意でジェフリーに提供してくれていた¹²⁾。つまり、ジェフリーはマルサス達よりも早くローモンド湖やその周辺の美や風趣から命の洗濯をなして、そこへの遊覧をマルサス達に強く慫慂したと推断されるのである。

もちろん、マルサス達は推奨されたであろうクライドの滝（Falls of Clyde）にも足を伸ばしている（7月1日）。その途次、ちゃんとラナークを一望してもいる。それは旅路の単なる一幕に過ぎなかったのであろうか。それとも、その際に、マルサスの脳裏を去来したのはオウエンとの対談であったのであろうか（訳注〔9〕を参照）。なるほど、オウエンの身はその時アメリカのインディアナ州ニュー・ハーモニーにあった¹³⁾。当然、再会はなかった。とはいえ、言わずもがな、オウエンはゴドウィン（William Godwin, 1756-1836）の『政治的正義』（1793年）からも影響を受けつつ、性格の環境形成論を錬成していき、『人口論』を公然と論駁した¹⁴⁾。翻って、マルサスの方は5版『人口論』（1817年）の中でこれに敢然と応酬、呼応した¹⁵⁾。しかし反論と同時に、マルサスはオウエンのことを「私がかから尊敬する紳士」と呼称し、「多くの善行を積んだ真の博愛主義者」と敬ってもいた¹⁶⁾。ならば、マルサスは見解を全く異にするも、決してオウエンを忌避していたわけではないとしても差し障りないのではなかろうか

以上のような諸事にもまして脳漿を絞っておくべきは、『覚書』や『旅行記』におけるマルサスの経済的観察の意味合いであろう。以下、この点に照射しておきたい。例えば、マルサスは既に『覚書』において、貧民の救済権を認めていないエディンバラの1教区の救貧税を1ポンドあたり4ペンス¹⁷⁾と耳にしたり、あるいはまたスコットランド各地の賃金を1日2シリング程度と書き記したりしている。そしてこれらの看取事は紛れもなく5版『人口論』（1817年）に編入されている。すなわち、マルサスは「イングランドの労働者の1日の賃金は2シリング¹⁸⁾」と書き加えているばかりか、救貧補助が殆どなされていないイングランド北部やスコットランドでは、労賃の騰貴は近年顕著で、「労働階級の境遇の改善と、生活の必需品及び

便宜品に対する支配力の増加とは最も著しかった」と俯瞰、叙述している¹⁹⁾のである。さらに、この記載は『経済学原理』（1820年）でより一層掘り下げられてもいく。つまり、マルサスは1814年までの実質賃金の上昇を一再ならず強調し、しかもこれに多面的な精察（製造業の高賃金、じゃがいもの普及、婦女子の収入、救貧手当、奢侈品・便宜品の節約といった視点）を加えていく²⁰⁾のである。

その『経済学原理』の中で、マルサスは「1810年及び1811年における37州の数字を平均して、日雇い労働の週労賃が14シリング6ペンスである」と明記していた²¹⁾。しかし『価値尺度論』（1823年）に至ると、「1811年以降のイングランドの農業労働の価格については、何の報告も見当たらない。おそらく騰貴しなかったであろう。」と表白する²²⁾。にもかかわらず、並行して、「スコットランドの賃金については多少研究し、きわめて貴重な消息を手にした。」と追記し²³⁾、マカロクの好意により入手したカークッドブライト（Kircudbright）郡、すなわちスチュワートリー自治区の情報に依拠して、1823年4月現在、家屋付きの農場使用人は年に10ポンドないし14ポンドを、また婦人使用人は3ポンド10シリングないし6ポンドを支給されていると論じてもいる²⁴⁾。本『旅行記』の諸所に見出される賃金額（7月4日、7月8日、7月10日、7月12日）はこの継続として把握、詮索できよう。

無論、「食事付き（with diet）」の有無で²⁵⁾、賃金は異なる。また、「出来高払い（by piece work）」（7月4日）や「農業上の請負仕事（task-work）」²⁶⁾で働くのか、あるいは日雇い労働²⁷⁾であるかでも違ってくる。ましてや、「規則的」な年雇用の使用人の場合となると、別な尺度や観点が必要となろう²⁸⁾。ここでは、食事無しの農業日雇い労働者の賃金²⁹⁾に限定したい。それでもなお、地域や仕事内容によって週給7シリングから12シリングまでと幅が出てくる。例えば、「グラスゴー付近においては農業労働者の賃金は、1816年には1週11シリングであったものが、1819年には7シリング6ペンスに下落している」³⁰⁾との記述と1819～25年の時期における微減傾向³¹⁾とを接合、照合するなら、マルサスの上記のような見立てはやや低目ではあるものの、強ち現実離れではないと言えよう。そしてマルサスは2版『経済学原理』において、「『農業報告書（Agricultural Report）』における多数の叙述、及び私が他の方面から聞いたことからして」と前置きした上で、1824年以来、「スコットランドでは、収穫期の賃金（harvest wages）は2シリング6ペンスないし2シリングから1シリング6ペンスないしは1シリングへ下落し、その結果（週給は）15シリング及び12シリングから10シリング及び8シリング6ペンスへと」下降したと書き加えていった³²⁾のである。

また、こうした「貨幣賃金（money wages）」（7月4日）とは別に、時には「使

用人に対する衣料品や食物の給付」³³⁾もなされていた。現物支給はとりわけスコットランドでも盛行で、マルサスが7月4日に聞知した「粗びき粉³⁴⁾や牛乳」に限らず、数足の靴を給付されることさえあった³⁵⁾。マルサスはこうした実情を2版『経済学原理』に「一般に低地地方においては労働の賃金の主要部分は現物で (in kind) で支払われる」³⁶⁾と加筆しているのである。

生産面に転ずると、既婚農業労働者に対してじゃがいも³⁷⁾用の小土地、牝牛用の牧草地、及び小屋を提供していた「小屋住み農制度」に目が落ちる（7月4日、7月10日）。というのも、それはヤング (Arthur Young, 1741-1820) が提唱し、マルサスも付帯条件付きで奨励していた分貸地 (allotment) 制ないしは小土地割り当て制を想起させる³⁸⁾からである。ことさら興味を引かれるのは両者の比較である。このうち、地代に関しては大差ないように思われる。すなわち、マルサスは農地2エーカーと牧草地に対する地代を7～8ポンドと聞き及んでいる（7月10日）。一方、イングランドの「労働者向けの分貸地はエーカーあたり2～3ポンド、多くて4ポンドの地代で貸し出される」³⁹⁾と通観されているのである。仮にノーサンバーランドの例を引いても、最良農地のエーカーあたりの地代は45ペンスで、また1等牧草地のそれは2ポンドである⁴⁰⁾からスコットランドの当該地とほぼ変わらない。それに引き替え、家屋地代の事情の方は相違が際立っていよう。とりもなおさず、スコットランドでは、小屋は現物賃金として無償で給されている（7月4日、7月10日）。これに対し、イングランドでは、週に1シリング強で貸与されている⁴¹⁾。もとより、ノーサンバーランドでも、無料の「住居地代」が存したけれども、農業労働者の多くは年間3～4ポンドを叩いても、牝牛と豚が「家族と同じ屋根の下に収容され、同じ戸で出入り」するという住宅事情にあったのである⁴²⁾。

最後に、7月10日に記入されている「過剰人口 (overpopulation)」という用語のみを瞥見し、結びに代えておきたい。本来、この実体はマルサスの富増進論 (資本制分析) の解明において穿鑿、把握されねばならない⁴³⁾。しかしここでは、この術語に関連してのみの形式的な抄出、確認にとどめる。初版『人口論』では、「超過 (overcharged) 人口」という語も散在している⁴⁴⁾けれども、圧倒的には「過多 (redundant) 人口」が多用されている⁴⁵⁾。2版以降の諸版でも、「過多人口」の頻出はやまない⁴⁶⁾。次いで、目立つのが「充満 (overflowing) 人口」である⁴⁷⁾。それに「過分な (superfluous, supernumerary, or superabundant) 人口 (労働)」という表記も無視できない⁴⁸⁾。また、「過度 (excessive or excess) 人口」といった語法もある⁴⁹⁾。「過剰なる人々 (over-peopled)」⁵⁰⁾を除くと、網羅的ではないにしろ、検出できた「人口過剰」あるいは「人口稠密の過剰 (over-populousness)」という用法は各々1

ヶ所のみである⁵¹⁾。さらに、1824年刊の『人口論要綱』から摘出できるのも、「人口横溢国 (populous country)」、「過剰な人々 (over-people)」、及び「過分な人口数 (numbers)」といった用例にすぎない⁵²⁾。また、視野を『経済学原理』にまで広げても、「人口過剰」という語句は見当たらない。そこから見出されるのは、「労働の維持に充てられた基金 (funds) を上回る人口の過度」⁵³⁾という表現を省くと、「過剰人口」と「充満人口」のみであろう⁵⁴⁾。要するに、『旅行記』に見られる「過剰人口」という語法はこれほどまでに大変稀有なのである。

注

- 1) 書誌的には、John Stuart Batts, *British Manuscript Diaries of the Nineteenth Century* (Centaur Press, 1976) が手引きになる。諏訪部仁「スコットランドの旅」中央大学人文科学研究所編『英国十八世紀の詩人と文化』(中央大学出版部、1988年)第V章や、江藤秀一著『十八世紀のスコットランド』(開拓社、2008年)が例示できる。また、ほぼ同時代の日記としては、Robert Southey, *A Tour in Scotland* (James Thin, 1972) やBarrie M Ratcliffe & W.H.Chaliner ed., *A French Sociologist Looks at Britain :Gustave d'Elichthal and British Society in 1828* (Manchester Univ. Press, 1977)、あるいは1833年に刊行されたWillam Cobbett, *Cobbett's Tour in Scotland* (Aberdeen Univ. Press, 1984) 等がある。さらには、指昭博著『イギリス発見の旅』(刀水書房、2010年)も道標となろう。
- 2) Patricia James, *Population Malthus* (London:Routledge & Kegan Paul, 1979), p.198.
- 3) 拙訳「下院委員会におけるマルサスの2証言」『長崎県立大学論集』第34巻第3号(長崎県立大学学術研究会、2000年)81頁。
- 4) Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, p.253.
- 5) James Bonar, *Life of Thomas Malthus* (Univ. of Illinois Library, 1956), p.412、南亮三郎著『マルサス評伝』(千倉書房、1966年)58-9頁、Patricia James, *Population Malthus*, p.417、及びJohn Pullen, "Further Details of Life and Financial Affairs of T.R.Malthus", *History of Economic Review*, No.57,(Winter, 2013), p.20等を参照。
- 6) Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, pp.254-7.
- 7) 拙論「マルサスの『北欧旅行日記』瞥見」『長崎県立大学論集』第36巻第4号(長崎県立大学学術研究会、2003年)109頁註54を参照。
- 8) 拙訳「フランシス・ジェフリーのマルサス『人口論』評」『長崎県立大学論集』第45巻第3号(長崎県立大学学術研究会、2011年)109頁。
- 9) ジェフリー自身は1825年の夏には経済学者マカロクを意識し始めていた〔Lord Cockburn, *Life of Francis Jeffrey* (Edinburgh: Adam & Charles Black, 1872), pp.270-1〕。なお、マルサスの方は既に1820年以来マカロクと交信していて〔Patricia James, *Population Malthus*, p.311〕、「資本」という術語に与えた極めて異常な拡張」という点を除けば、概して、「マカロク氏を高く評価している」と言えるかもしれない〔マルサス著玉野井芳郎訳『経済学における諸定義(1827年)』(岩波書店、1950年)91-2頁、また同訳書57、70-8頁も参照〕。
- 10) Patricia James, *Population Malthus*, pp.428-9.また、柳田芳伸・山崎好裕編著『マルサス書簡

のなかの知的交流』（昭和堂、2016年）262-3、292頁も参照。

- 11) 荒井智行著『スコットランド経済学の再生』（昭和堂、2016年）22頁。とはいえ、ジェフリーが師ステュアートと仲違いしていたわけではない〔Lord Cockburn, *op.cit.*, pp.249,402〕。また、言うまでもなく、ステュアートの方もマルサスの『人口論』のもつ意義を買っていた〔荒井同上書63, 144-5, 173-5, 179, 185-6頁〕。
- 12) Lord Cockburn, *op.cit.*, pp.262-5.
- 13) 上田千秋著『オウエンとニューハーモニイ』（ミネルヴァ書房、1984年）306頁、並びに丸山武志著『オウエンのユートピアと共生社会』（ミネルヴァ書房、1999年）257頁。
- 14) ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』（家の光協会、1971年）187-8頁、永井義雄著『ロバート・オウエンと近代社会主義』（ミネルヴァ書房、1993年）153-4頁、及び丸山前掲書224-5頁。
- 15) 吉田秀夫譯『各版対照 マルサス人口論』（春秋社、1949年）Ⅲ79-85頁、Ⅳ144-8頁。なお、この反駁の検討の詳細については、永井義雄「マルサスとオウエン」『経済学論纂』第34巻第5・6合併号（中央大学経済学研究会、1994年）を参照。
- 16) マルサスがオウエンに筆を向けたのは、彼が「著名な綿紡績工場経営者であった」ことを一因としていたとの指摘もある〔永井同上論文132頁〕。
- 17) 新救貧法の下ではあるけれども、ノーサンバーランドの救貧税は同額の「ポンドあたり4ペンス」であった〔ジェームス・ケアド著佐藤俊夫訳『イギリス農業1850-51年』（今井書店、2011年）327頁〕。他方、中部・西部諸州や東部・南部沿岸諸州の平均救貧税はポンドあたり約1シリング10ペンスであった〔同訳書412頁注〕。
- 18) ちなみに、2版『経済学原理』（1836年）においても、1日あたりの労賃は「20ペンスまたは2シリング」と想定されている〔吉田秀夫譯『マルサス 経済学原理』（岩波書店、1937年）上巻221頁、また同訳書204、210頁も参照〕。なお、実際には「1814-15年の全国平均農業賃金は13シリングであったが、それは1816年には12シリング、1820年代には10シリング以下に低下する」と概説されている〔小山路男著『イギリス救貧法史論』（日本評論新社、1962年）193頁、また大前朔郎著『英国労働政策史序説』（有斐閣、1961年）76-7頁も参照〕。
- 19) 吉田譯『各版対照 マルサス人口論』Ⅲ155, 160頁。
- 20) 吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻24, 33, 73頁。
- 21) 同上訳書下巻72頁。
- 22) マルサス著玉野井芳郎訳『価値尺度論』（岩波書店、1949年）67頁。また同訳書72頁も参照。
- 23) 同上訳書63頁。
- 24) 同上訳書68頁、及び70頁註。
- 25) 吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻53, 60頁。
- 26) 吉田譯『各版対照 マルサス人口論』Ⅲ329頁、また吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻28、32頁も参照。マルサスはその仕事を「生垣造り夫、溝堀夫、杭打ち夫、打穀夫、及びその他の請負仕事」と描写している〔吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻61頁〕。
- 27) マルサスは「優れた労働者は日雇いで雇われるが、低級な職人や年齢その他の理由で1日一杯の仕事果しえない人々はやはり出来高で（by the piece）働かされている」と説明している〔玉野井訳『価値尺度論』69-70頁〕。
- 28) 拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』（昭和堂、2005年）51-3頁。

- 29) マルサスは「多数の農業労働者は日雇いであり」とし〔吉田譯『各版対照 マルサス人口論』Ⅲ350頁〕、「日雇い労働は、夏冬の平均をとれば、すべての交換されえる物品の中で、最も着実なものである」と述べている〔吉田譯『マルサス 経済学原理』上巻197頁〕。
- 30) 芝野庄太郎著『ロバート・オーエンの教育思想』（御茶の水書房、1961年）61頁。
- 31) B・R・ミッチェル編犬井正監訳『イギリス歴史統計』（原書房、1995年）157頁。
- 32) 吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻64頁、65頁2版註。なお、1824～37年において、イングランドの労働者の平均賃金は9シリング4ペンスから10シリング4ペンスへと上昇したとされている〔新井嘉之作著『イギリス農村社会経済史』（御茶の水書房、1959年）446頁〕。
- 33) ジョン・プレン著溝川喜一・橋本比登志監訳『マルサスを語る』（ミネルヴァ書房、1994年）235頁。
- 34) イギリス人のいう「コーン」とは「小麦、大麦、オート麦などの穀物」のことであった〔ダニエル・プール著片岡信訳『19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろうか』（青土社、1997年）221頁〕。スコットランドでも、もちろん小麦パンや大麦パンも口にされてはいたけれども、ひき割りオート麦から作られるオート・ポリッジ（粥）で腹を満たしてもいた〔モリー・ハリソン著小林裕子訳『台所の文化史』（法政大学出版局、1993年）63頁、及びV.T.J.アワール著村松昌家ほか訳『イギリスの社会と文化200年の歩み』（英宝社、2002年）29頁〕。
- 35) 新井前掲書418頁、並びに新井嘉之作「十八世紀におけるスコットランドの土地制度について」『史学研究』第100号（広島史学研究会、1967年）145頁。
- 36) 吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻65頁2版註。
- 37) スコットランドでは、1740～50年代にジャガイモが一旦受け入れられると「急速に普及し、国の主食となった」けれども、それは安っぽいランバー種のジャガイモではなかった、水っぽいランバー種は家畜用に充てられていた〔ラリー・ザッカーマン著関口篤訳『ジャガイモが世界を救った』（青土社、2003年）125、189頁〕。
- 38) 柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡のなかの知的交流』（昭和堂、2016年）27-30頁。
- 39) ケアド前掲訳書25頁。
- 40) 同上訳書359、372頁。
- 41) 例えば、同上訳書70、79、95、109、136頁等。
- 42) 同上訳書332、359頁。
- 43) この類の試論は枚挙にいとまがないが、例えば、杉山俊治「マルサスの過剰人口（*redundant-population*）について」『南山大学経済学部創設記念論文集』（南山学会、1961年）、入江獎「マルサスの人口論について」堀経夫博士古稀記念論集刊行会編『経済学・歴史と理論』（未来社、1966年）所収、及び前掲拙著等。
- 44) 高野岩三郎・大内兵衛訳『初版 人口の原理』（岩波書店、1972年版）94、97、117頁。
- 45) 同上訳書15、55、82、89-90、196頁。また同訳書98、124頁も参照。
- 46) 検索の範囲では、吉田譯『各版対照 マルサス人口論』I 117、121頁、II 11、12、19、29、104、118、314、318頁、Ⅲ95、101、104、140、342頁、IV27、29、31、62、68、123、259、260、261、263、266、277頁。文明国では、さしあたり、「過剰人口、換言すれば、極めて低い賃金と雇用不足から生ずる貧困と貧窮（*wretchedness*）」と約言できるかもしれない〔同訳書IV226頁〕。
- 47) 同上訳書I 27、128、131、240、248頁、II 9、28、209頁、IV185頁。
- 48) 同上訳書I 81、111、117、131、187、189、218頁、II 105頁、Ⅲ26頁、IV235頁。

- 49) 同上訳書 I 250頁、II 118頁、IV 127頁。
- 50) 同上訳書 II 221頁、III 322頁。
- 51) 同上訳書 I 96頁、IV 127頁。
- 52) 小林時三郎訳『マルサス人口論綱要』（未来社、1959年）38、61、62頁。
- 53) 吉田譯『マルサス 経済学原理』下巻180頁。
- 54) 同上訳書下巻71、118、215、243頁。なお、『経済学原理』では、「飢えつつある（starving）人口」〔同訳書下巻310頁〕や「人口減退（depopulation）」〔同訳書下巻71頁〕にも容喙されているし、特に「停止人口（stationary population）」への言及は極めて夥しい〔〔同訳書上巻275、395、418、419頁、下巻9、15、19、98、108、118、119頁〕〕。

凡例

1. 訳出に際しては、原文中のdash（—）は基本的に省略し、前後を関連付けながら進めた。
2. 本訳の日記という特質を鑑み、原文に散在している断片章句に関しては、訳者が適宜、それらをつなぎ合わせて、意識を試みている。それゆえ、時として、マルサスの真意を歪めていることがあるかもしれない。
3. テキストの原文〔Patricia James. ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, pp.257-68〕に付されている多数の注記については、訳者の判断に基づき、必要最少に絞って、通し番号に変換し、訳載している。なお、紙幅の関係上、削除した原註に関しては、訳者が適宜に亀甲で括った補記部において、これらを反映させるよう努めた。また、亀甲で括った補記部の作成に際しては、主として、J.M.Pullen & T.R.Parry. ed., *T.R.Malthus: The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University*, Vol.2, pp.216-40に収録されているハリエッタ夫人による日記誌に依存している。
4. 訳者による注記は亀甲内数字の通し番号で示した。

マルサスのスコットランド旅行記（1826年）

ホリン・ホール〔リポンに近いこの地には、ハリエッタ夫人の妹アンネ・エリザ（1790-1875）の嫁ぎ先があった〕 6月17日

ノーザラートンへ、20マイル〔このマイルの距離数はマルサスの算出で、不正確である—以下同じ〕。

ダーリントンへ、16マイル〔ダーリントンでは、トムズという名のクエーカー教徒^[1]の本屋に立ち寄り、そこの婦人から年代物の版等の多くの珍書を見せてもらう〕。食事を取る。ラシフォードへ、9マイル。ダラム、9マイル。宿泊〔ダラムでは、大聖堂^[2]が立っている木の生い茂った岩場の峡谷に感嘆し、橋から見たその眺めは素晴らしかった〕。

6月18日（日曜日）

大聖堂〔11時にミサに出掛け、礼拝、とても快い調べを耳にするも、アニックで進行中の選挙に阻まれる〕。散策。カレッジ〔1808年に創立されたウショー・カレッジは、ウショー・ムーア村の近くにある旧カトリック神学校〕へ。モーペスへ、15マイル。ウェルドン・ブリッジへ〔ここで、昼寝〕、10マイル。ブリンクバーン・プライオリーへ〔ここで、茶を飲み、少し散歩〕。〔小川の〕コケ川〔の上にある古い大寺院で〕宿泊。

6月19日

ホウィテインハムへ、10マイル。朝食^[3]。コーンヒル、12マイル。ツイード〔・バンク〕、スコットランドのコールドストリーム、ケルソーを通り抜けてメルローズへ〔昼寝〕、16マイル。大寺院〔感嘆する、特に彫刻は目を見張るばかりに素晴らしい、ある彫刻家がスコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）の凋落を語り、その短い詩を繰り返えしてくれた〕にて月明かり。エイルドン・ヒルで就寝。

6月20日（火曜日）

トーランスへ、12マイル。ツイード・バンク、ガラ・ウォーター、フシエ・ブリッジを通過してエディンバラへ。ディナーはL.ホナー^[4]（Leonard Horner, 1785-1864）氏と〔ハリエッタ夫人の日記によれば、「ジェフリー（Francis Jeffrey, 1773-1850）氏ら」と〕同席。

6月21日（水曜日）

裁判所へ。法廷弁護士（Advocates）図書館¹〔図2.参照〕、事務弁護士用（Writer's）図書館。カレッジ²〔図3.参照〕。博物館。〔夕方には、プリンセス・ストリート・

図2. 法廷弁護士図書館（1829年）



（注）Mary Cosh, *Edinburgh: The Golden Age*（Gutenberg Press, 2014）の挿入図より。

図3. 1827年に完成した大学の新学舎



（注）Mary Cosh, *Edinburgh* の挿入図より。

ガーデンを散歩し、エディンバラ城にジグザクして上り、その岩に驚嘆した。)ディナーは〔F.ホーナーの友人で、自由主義的裁判官であった〕マレー（John Archibald Murray, 1778-1855）氏と〔弁護士として辣腕を振るっていた〕ラザフォード（Andrew Rutherford, 1791-1852）氏と同席。

6月22日

〔再度〕裁判所へ。〔何も聞知しなかったけれども、〕ウォールター・スコット氏に出会う。ディナーは、〔1813年に治安判事裁判所長官になっていた〕アロウェイ（David Cathcart, Lord Alloway, 1763-1829）伯爵、〔匿名の著『感情をもった人間』を1773年に刊行した文筆家で、かつスコットランドの租税監督官でもあった〕マッケンジー

(Henry Mackenzie, 1748-1831) 氏 [図4.参照]、[スコットランド人の判事の] クランシュトゥン (George Cranstoun, 1770-1850)、そして [スコットランド人のウィッグ派の法律家でジェフリーの親友の] コーバン (Henry Cockburn, 1779-1854) 氏と同席 [但し、ハリエッタ夫人の日記によれば、「ジェフリー (Francis Jeffrey, 1773-1850) 氏ら」と食事とある]。

図4. マッケンジー



(注) Mary Cosh, *Edinburgh* の挿入図より。

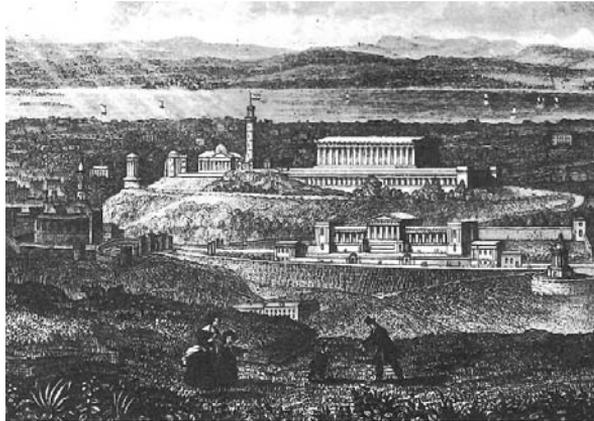
6月23日

ラザフォード夫妻がやって来て、[スコットランド王宮の主部である] ホーリールードハウス宮殿 [古めいた小礼拝室、メアリー (Mary Stuart, 1542-87) が侍女と夕飯を取った婦人の小さな私室、未熟な肖像画の陳列室]、ディナーはラザフォード夫妻と同席。夕方には、ホナー氏と [夕飯]。カルトン・ヒル³ [図5.参照] で翌朝2時半まで [カルトン・ヒルからの日の出をジェフリー氏やコーバン氏らと観賞するために翌朝2時半まで明かり^[5]を付けていた、日の出は3時半、爽やかな朝焼け]。

6月24日

[エディンバラ城から西北へ約3マイルのホルストルフィン・ヒルの東側坂道にある] クレーグ・クルーク邸⁴ [図6.参照] へ [但し、日の出後の就寝で、朝寝坊]。それはすり鉢状である。ディナー [愉快的な会席で、野菜の上に乗った葡萄酒を飲む]。コーバン氏、マッケンジー氏、ラザフォード氏、[ナポレオン軍の司令官の1人で、1817年6月20日にエディンバラで結婚した] フラハウト (Auguste-Charles-Joseph de

図5. カルトン・ヒル



(注) A.J. Youngson, *The Making of Classical Edinburgh* (Edinburgh Univ. Press, 1967), p.161より。

図6. クレーブ・クルーク邸（ジェフリーの私邸）



(注) Lord Cockburn, *Life of Francis Jeffrey* (Adam & Charles Black, 1872) の扉図より。

Flahaut de La Billarderie, 1785-1870) 伯爵、〔弁護士で、当時はハイランド協会の会員であった〕クレイグ (William Gibson Craig, 1797-1878) 氏、そしてマレー氏。6月25日 (日曜日)

〔もちろん御者と馬を雇った上で、自己所有の2頭立て4輪馬車 (carriage)⁵で〕セント・ジョージ教会〔図7.参照〕へ〔そこでは、トンプソン (Andrew Mitchel Thompson, 1779-1831) 博士 (1823年にアバディーン大学から取得) による実際の説法を耳にできなかった、トンプソンは社会問題にも関心を寄せ、その遺志は。チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847) へと引き継がれた〕。〔クレーグ・クルーク邸に戻った後に〕ディナー。・〔経済学者マルサスに余り好意的でない〕マ

図7. セント・ジョージ教会



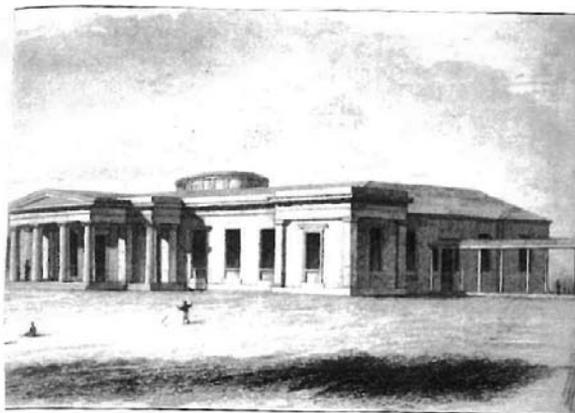
(注) Mary Cosh, *Edinburgh* の挿入図より。

カロク^[6] (John Ramsay McCulloch, 1789-1864) 氏と同席 [お茶の後で、景色を満喫しながらの長めの散策、その帰り道では雄牛の群れに追っかけられた]。

6月26日

裁判所へ。[エディンバラの近郊のクラモンド出身で、自らの身体障害を克服し、やがてはスコットランドの関税局の監査役に指名されるまでになった]ウッド (John Philip Wood, d.1838) 氏の授業中の学校へ [ウッドはこの学校で小さな弊衣の少年達の活力を復活させていた、マルサス夫妻は大いに関心を寄せた]。新アカデミー⁶ [図8.参照] へ。アロウェイ夫妻、歴史家 [ランゲ (Malcolm Laing, 1762-1818)] の未亡人のランゲ婦人 [フォーファーシャー出身で、子供を有していなかった]、[グ

図8. エディンバラ・アカデミー (1830年)



(注) Mary Cosh, *Edinburgh* の挿入図より。

図9. ハミルトン教授（1837年）



（注）D.B. Horn, *A Short History of the University of Edinburgh* (Edinburgh Univ. Press, 1967), p.118より。

ラスゴー生まれで、当時はエディンバラ大学の内政史の教授であり、骨相学にも興味を抱いていた] ウイリアム・ハミルトン卿 (Sir William Hamilton, 1788-1856) [図9.参照]、及び [スコットランド南部のロクスバークシャー出身で、1790年11月にエディンバラ大学で英国初の農業担当の教授(年棒50ポンド)に就任していた] コベントリー (Andrew Coventry, 1764-1832) 氏 と食事。

6月27日

裁判所を訪問。ディナーの同伴者はなし。

6月28日

アンストラザーへ [好天で、6時にはアンストラザー行の蒸気船^[7]に乗り、到着後10時まで朝食をなした]。ブルース夫妻に会う。[見苦しい地方であるが、南西部のフォース川の河口にあるエリーは美景]。2頭立て4輪馬車に [5マイル程] 乗車 [見苦しい地方という印象であったが、走ってみるとそうでもなく、特に南西部のフォース川の河口にあるエリーは美景]。スミス夫妻と [1809年にセントアンドリュース大学の自然及び経験哲学の担当教授となっていた] ジャクソン (Thomas Jackson, d.1837) 博士に会う。[アンストラザーで就寝]

6月29日 (木曜日)

[アンストラザーの北西9マイルの] セントアンドリュースにジャクソン博士と同行し、そこで、チャーマーズ博士^[8] [図10.参照]と朝食。[年月を経た]大聖堂、[歴史ある1413年の創立のカレッジ、その講義室]、広場にある [奇妙なセント・ルーズ] 塔を観覧 [目を覆いたい穀物地もあるけれども、セントアンドリュースは一見に値する古い大司教区]。夕食。ダグラス夫人と姉妹。[セントアンドリュース]

図10. チャーマーズ



(注) Mary Cosh, *Edinburgh* の挿入図より。

スで就寝]

6月30日

[アンストラザーでアバディーンからの蒸気船に乗り2時間半で] エディンバラへ戻る [船上から見たエディンバラから北へ2マイルのニューハイブンは静寂で、実に佳景]。

7月1日 (土曜日)

[1時過ぎにエディンバラを出発し、クライド川に面した] ラナーク⁽⁹⁾へ。 [途中

図11. 19世紀初めのニュー・ラナークの紡績工場



(注) T.S.スマウト著 木村正俊監訳 『スコットランド国民の歴史』 (原書房、2010年) 403頁より。

図12. クライドの滝



(注) W.O. Henderson, *Industrial Britain under the Regency 1814-18* (Frank Cass & Co. Ltd, 1968) の挿入図より。

のミッドカルダーで馬を取り換え、ラナーク〔図11.参照〕に6時着、食後、幻想的な森に歩いて入り込み、一連の〕クライドの滝〔図12.参照〕へ。ボニントン。コラ・リン〔ニュー・ラナークへ戻る〕。

7月2日（日曜日）

〔オールド・ラナークにある〕救済教会へ〔そこで支離滅裂な説法を聞く〕。〔丘の麓にある通行税徴収のための遮断棒の傍で2頭立て4輪馬車から降り、マウス峡谷を見物、深い谷間に細い〕マウス川。〔森林の〕カートランド・クレイグスや〔マウス峡谷の高所に跨る〕橋を通る。ハミルトンで〔馬を取り換え、6時には〕グラスゴー入り。〔ディナーを取り、〕〔1800年にマリアン (Marian) と結婚したジェフリーの義弟で、高名な外科医であり、1799-1816年にはグラスゴー大学の植物学の副 (Deputy) 教授であった〕ブラウン (Thomas Brown, 1774-1853)〔博士〕夫妻を訪ね、お茶を共にする〔それからブラウン一家と町見物をなし、見事なガーデン・スクエアや、石造り住宅、クライド川に架かった橋、及びグラスゴー埠頭に目を奪われ、感心する〕。

7月3日（月曜日）

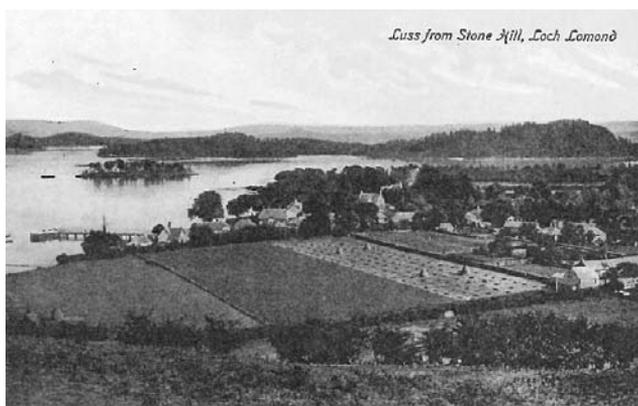
〔9時に〕インヴァラリイ行のジョージ・カニング蒸気船に乗り、出発。〔子女を載せた蒸気船の天候〔激しい降雨〕のためダンバートンで足止めされる。〔やってきたボートを漕いで、キングス・アームズ高さ240フィートのダンバートン・ロックと呼ばれる火山玄武岩の上の〕ダンバートン城へ〔階段と鉄製の手すりに沿って歩いて登る、クライド川の眺めは良好であったが、山々は霧に覆われていた〕。〔古い軽装4輪駆馬車 (chaise) でローモンド湖の西海岸にある小村〕ルスへ〔ルスでは小さなインに止宿〕。〔ディナーの後の〕夕方には、最も高い〔2 Moiders と呼称

されていた] 島へ〔上陸し、他の無数の小島を一望したが、大抵は岩山で、せいぜいオークの低木が散見されるのみで、アイルランドのキラニー湖^[10]のような風光明媚はなかった〕。〔ローモンド湖の東岸にある高さ3,196フィートの高地の山〕ベン・ローモンドには雲が〔半分、山麓まで〕かかっていた。

7月4日（火曜日）

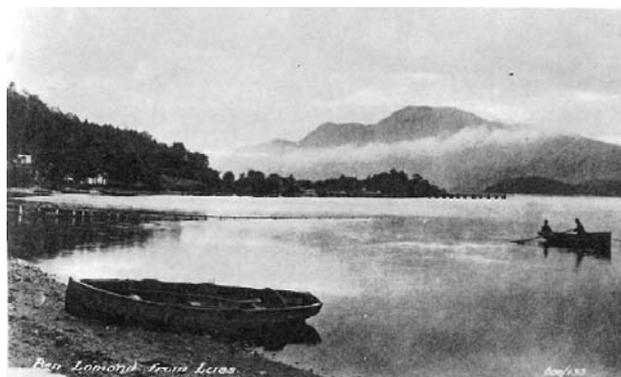
〔好天、湖を眺望するために〕朝食前に有料道路^[11]を通過して〔草で覆われた〕丘へ。朝食後別な道から小さな丘へ。ローモンド湖畔のルスとベンの眺め〔図13.参照〕。蒸気船〔待ち時間に、小石の多いなぎさから鮮やかなベン・ローモンドを望見、〕〔図14.参照〕。ロワルデンナン〔息子のヘンリー（Henry, 1804-89）はベン・ローモンドへの登山のためにここで下船〕、ターベット、インバースナイド。〔無頼漢の〕ロバート・ロイ（Robert Roy MacGriogair, 1671-1734）の隠れ洞窟〔図15.参

図13. ローモンド湖畔のルス



（注）訳者所有の古絵葉書より。

図14. ルスから望んだベン・ローモンド



（注）訳者所有の古絵葉書より。

図15. ロイの隠れ洞窟



(注) 記者所有の古絵葉書より。

照] [この沿岸部で蒸気船は一時停泊]。[ターベットで下船、そこの改修されたインでディナーを取って、] 夕方に、[ベン・ローモンドとは反対側にあるヒースと草地の] 山の突出部 (shoulder) まで散策する [しかし、不快な逍遥であった]。

ルスで、スレート採石工は1日あたり約20ペンスの賃金で働くと耳にしていた。常雇いであり、賃金の下落は殆ど、あるいは一切なかった。

ファイフシャイアにおいても同様であるとブルース氏から聞いた。賃金は1825年に高騰し、再び下落することはなく、農業仕事にも不足はない。1811年に独身男子に対する12, 13シリングであった労働価格は週に12シリングとなった。1823年になって、9シリングまでに下落し、1825年には10シリングに上昇し、そのまま高止まりとなっている。1826年6月30日現在、今年のほぼ3ヶ月間の賃金はわずか9シリングで、また収穫期の大半は出来高払いで (by piece work) 行われる。

既婚男子には一定の年間貨幣金額と共に、1頭の牝牛用の牧草地、小屋 (a house)、じゃがいもや亜麻 (flax)^[12]用の耕地が支給されている。戦時のある時期には、未婚の耕作農夫 (ploughmen) は年間に18ポンドと、併せて、さや (bolls) 6.5杯分^[13]の粗びき粉 (meal) と牛乳とを給されていた。1816年には、貨幣賃金は9ポンドにまで下落した。現在は12ポンドである。既婚男子の収入は異論なく独身男子の稼ぎよりもずっと価値がある。但し既婚男子の貨幣賃金は独身男子の半分程度ではある。

さや1杯の小麦は4ブッシェル強で、大麦やオート麦では6ブッシェルである。

スコットランドの大抵の地域では農場は現在貸与されていて、穀物価格と連動している。すなわち、すべての地代は穀物価格と変動する、また時には一部が貨幣で蓄えられている。

その平均生産高は土地の品質に応じて割り出されている。また地代の方は定期市での価格に順応して支払われている。

いま、1800年から1821年に至るまでの定期市での穀物の平均価格を挙げれば、

さや1杯の小麦	41シリング6ペンス
さや1杯の大麦	32シリング3/4ペンス
さや1杯のオート麦	25シリング1/4ペンス

目下、小麦価格はさや1杯当たり約30シリングである。アバクロンビーの地所はかつてエーカーあたり5ポンドで貸し出されていた。それは戦時の高値である。

現在では、借地権には、1スコットランド・エーカー〔1.3エーカー〕あたりさや1.5杯分の小麦とさや1.5杯分の大麦とが認められている。

30シリングでのさや1.5杯分の小麦	2.5ポンド
29シリングでのさや1.5杯分の大麦	2.3ポンド
	計4.8ポンド
1825年では、小麦	1.16ポンド
大麦	1.7ポンド
	計3.3ポンド

その地代は段違いである。

7月5日（水曜日）

朝食後、ターベットの背後にある山へ〔但し、ハリエッタ夫人はヘンリーを迎えに船の発着場へ〕。〔ローモンド湖の西にある靴直しに似た高さ2891フィートの〕カブラーや〔標高3,318フィートの〕ベン・インを遠望しながら、ターベットより見応えある（superio）アロッチャーへ。インの周りには立派な立木〔やシダ〕。〔4時から7時半まで雷交じりの〕雨天。ディナー。夕方に、ターベットからロツホ・ロングの先端に至る険しい道を歩行する。そそり立つ、絵のような山々の偉観、とりわけカブラー、取りも直さずベン・アーサーは壯観。

7月6日

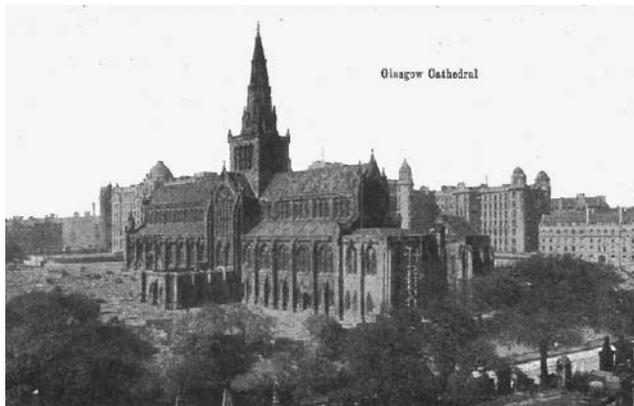
朝食前に、岩だらけの小川にある〔スコットランド長老教会の〕牧師館の傍の丘まで早足で歩いて行く。雨天。一団となって、丘に沿って教会や牧師館まで歩く。発着場で写生。ロツホ・ロング経由でロツホ・ゴイル・ヘッドに通じている所要時

間2時半の蒸気船〔セント・キャサリン号〕に乗る。ブラウン夫人とその娘達も。ビュート島。アラン島の花崗岩でできた山々。〔アロッチャーからの船旅は〕申し分のない外形である。グーロックは往時のコメット号⁷という蒸気船〔の盛観を彷彿させるその生誕地である〕。ロス・ニース・ヘレンズバラ。グリーンノック。グラスゴー港。ダンバートン城。ベン・ローモンドの景観。〔大英博物館の建築家ロバート・スミルク卿 (Sir Robert Smirke, 1780-1867) によって設計された〕アースキン・ハウス。総経費は10万ポンド。アースキン・フェリー。キャンベル・ハウス。水遊びをしている少年達。〔8時頃に〕グラスゴー着。〔それから、7月3日に手荷物を運んでくれた軽装の貸し4輪馬車でジョージ・インまで。〕

7月7日（金曜日）

〔1672年にリチャード・ホアレ (Richard Hoare, 1648-1719) によって設立されたロンドンのホアレ銀行発行の為替手形 (draft) で現金25ポンドを入手した後〕船の係留地へ。清新な住宅。ガーデン・スクエア。数々の新しい街路や西部へと連なる丘の上に立ち並ぶ優美な住宅。取引所。〔1272年頃にグラスゴー西部のレンフルーで生まれたとされる〕ウィリアム (Sir William Wallace, d.1305) の彫像。〔最も古い通りの1つである〕トロンゲート。左手の角にはハイ・ストリート〔かつてはグラスゴーで随一の繁華街、当時はスラム化しつつあった〕。〔1451年に設置された〕カレッジ。新旧の建物。大聖堂〔図16.参照〕。ジョン・ノックス (John Knox, 1513-1572) の柱状の記念碑。ブラウン博士の話では、蒸気船の航行がグラスゴーの人々の習慣をすっかりと一変させ、人々に強い蒸気力志向を与えた。さらに、船長達が子供料金を無償化して、両親が家族連れでの楽しい旅行を奨励したことで一層弾み

図16. グラスゴー大聖堂



(注) 記者所有の古絵葉書より。

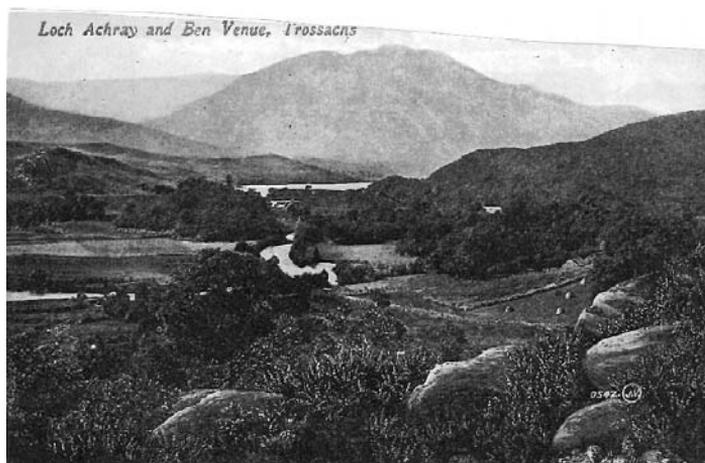
がついた。ちなみに、12歳であるブラウン博士の娘は無償であった。

破産、あるいは信用貸しや信用への大掛かりな検査、それにこれまでに記憶のないほどのその継続期間。〔朝食後、グラスゴーを後にする。〕〔馬を取り換えた^[14]、なお、通常、マルサス一行は馬引きのために1人の少年を雇っていた〕カンバーノールドを經由してスターリングへ〔ディナーとパース&ダンケルドまでの旅客馬の日割りの貸賃だけで1ポンド12シリングを払う〕。夕刻には、キャランダーへ。スターリング城の見物のため戻る。西部へと連立する山並み、ベン・レディ、ベン・ベニユ山等々。その後、激しい雨が行く手にあり〔遅く到着〕。

7月8日（土曜日）

トロサックス・インへ。ステュアート氏〔との朝食をトロサックス・インでなすという目論見は雨のため断念〕。ヴェンナチャール湖を通過して、ターク・ブリッジ〔この橋に差し掛かる前に天候が回復し始め、その後は終日好天〕へ、次いでアクレイ湖を経て、トロサックスへ〔午後6時過ぎからカトリン湖に向け、約1.5マイル

図17. ロッホ・アクレイ、ベン・ベニユ山、トロサックス



（注）訳者所有の古絵葉書より。

を散策〕。これらの地の上に聳え立つベン・ベニユ山の風景〔図17.参照〕。北の湖畔から見た湖は〔カトリン湖の東部の端にある〕ヘレンズ島〔この近くにあるボート小屋から手漕ぎ小舟で、一通り観覧し、それから小屋（rustico）付近で食事を取り、今度は湖畔の北側に上陸して見物し、再度、ボート小屋へ〕や近景である半島状の岬と相俟って絶勝である〔図18.を参照〕。湖の北岸の岩肌や樺〔や松〕の木の間の細部は奇観である。ベン・ベニユ山にあった丈夫な樺の木々は8年ほど前にモ

図18. ヘレンズ島、ベン・ベニュ山、カトリン湖



(注) 記者所有の古絵葉書より。

図19. トロサックス



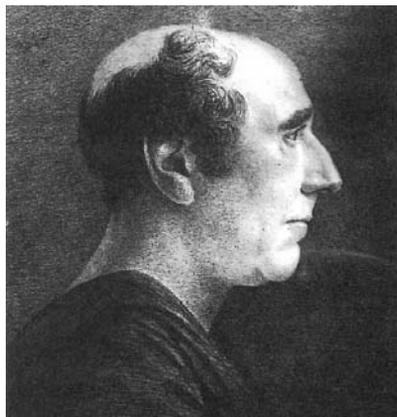
(注) 記者所有の古絵葉書より。

図20. トロサックスからパースへの山道



(注) 記者所有の古絵葉書より。

図21. D.ステュアート



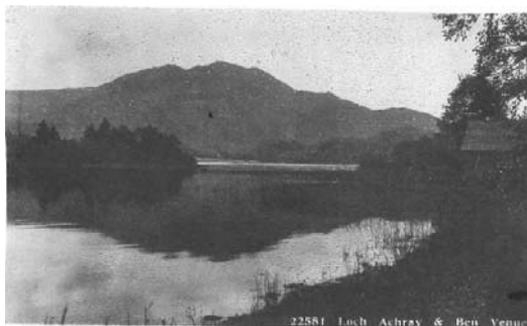
(注) D.B. Horn, *A Short History of the University of Edinburgh*, p.50より。

ントローズ侯爵 (James Graham, third duke of Montrose, 1755-1836) の手で悉く切り倒された。大損失である。故人はヘレンズ島で亡くなり、全盛期の大半を湖とそれを取り巻く環境のために投じた。ベン・ベニユ山には付き物である岩が多く、木が生い茂っているという光景はえも言われぬ景観で、おそらくはいままでに見たどの山よりも山自体としては秀美である [カトリン湖からの帰路では、アクレイ湖に流入している小川の岸沿いを楽しく歩く]。労賃は1週あたり9～12シリングである。グラスゴーでの破産騒ぎ^[15]はトロサックス [図19.及び図20.を参照] に影響を及ぼしてはいない。ステュアート氏 (多分、Dugald Stewart, 1753-1828) [図21.を参照] はイングランドの救貧法や十分の一税の状況^[16]に嘆息を洩らしている。

7月9日 (日曜日)

[7時半にはトロサックス・インを発って、] 朝食のためにキャランダーへ。爽

図22. アクレイ湖とベン・ベニユ山



(注) 訳者所有の古絵葉書より。

図23. キャランダーより望むベン・レディ山



（注）訳者所有の古絵葉書より。

図24. 高地での野外サクラメント



（注）訳者所有の古絵葉書より。

快な朝。ベン・ベニユ山は影で翳されている。アクレイ湖越えの〔絵のような〕風景である〔図22.を参照〕。キャランダー着〔図23.を参照〕。その橋から見上げるベン・レディ山は最高である。町に近接している野原では、ゲール人による説教が説かれている〔11時頃のこと〕。スコットランド教会におけるサクラメント⁽¹⁷⁾の施し〔図24を参照〕。様々な地区からの人々〔その中には、きちんとした素足の若き夫人の姿も〕の蝟集。少数ではあるが、高地地方の正装の姿。教会は溢れんばかりで、ゲール人の説法には人だかりができ、草地に腰を下ろし、草の多い小山の近くにある説法壇を取り囲んでいる。同じ原っぱにある別な説法壇には、ほどなくイギリス人の説教師が上がった。

ブラックリン橋。

アーン湖（Loch）の先端に通じる道の途中にあるレニー（Leni）を通過。

エルネ・ヘッド。滝。胸を張れる付属物をもっているベンリディ（Benlidi）。トロサックス（Trosachy or Trossachs）。ルブネイグ湖。さらには進まず、目指していたインがあるここで休止。インは未完成で、諦めていたけれども、インはロハーン

ヘッドに全く見劣りしないほどまでに建てられていて、絵筆を執りたいほどであった。雨天。〔湖からは離れている〕ロハーンヘッド〔の第2候補のイン〕で食事を取り、就寝。

7月10日

午前8時に朝食のためキリンへ。〔退屈な〕山地の道。半分は上り道で、半分は下り道。背後にはベンヴォイリック山 (Benvoirlick) を、前方にはベン・モア山を拝する。ダルマリーやティンドラムからの道に入り込む。キリンへの入り口、一際目に付くロッキー川⁹〔正式名称、ドチャード川〕に架かった〔2つの〕粗末な橋。水車場。〔高地地方の一族である〕マクナブの埋葬地〔モミの木が立っている小山〕。ベン・ロワーズ山。〔朝食後に〕ケネディー夫妻¹⁰と会う。丘まで徒歩。湖〔や山々〕の美景。グレノーキー卿 (John Campbell, 1696-1782) の住宅。ベン・ロワーズ山。〔岩の多い橋まで下りて、〕ケンモア方面にある中間点の家まで小船で〔8マイルほど下流にある湖へ、川を下ってイン近くまで行く際には驟雨に見舞われたが、急に好天〕。湖の先端部やベン・モア山を後景にした眺望。水不足には憤りが噴出。キリン近傍のオート麦と大麦の収穫は甚だしく不作にみえる。夏季の賃金は1シリリング6ペンス～20ペンス、また2シリリング、しかし仕事があつともあるとは限らない。2エーカーの土地と1頭の牝牛用の牧草に恵まれる小屋住み農制度 (Cottar system)。この (小土地付き) 家屋に関する地代は年間7ないしは8ポンドである。家屋は時として借地人の手で建てられ、一定の年数の間はその家屋への地代は無償である。13年、あるいは15年間の賦課 (Tasks) である。多くの家屋には暖炉がない。シダが生えた草葺き屋根。キリンは高地地方の大村落で、良き好例である。

人々は高々2, 3エーカーの土地を1頭あるいは数頭の牝牛用の山肌にある牧草と交換するのを常としている。

湖の傍の岩の下での冷えた肉で〔強風で延引していた〕食事を取る。

〔高波の中で2マイル程渡し船に乗った後には、〕一層快適にみえる2輪2輪馬車に乗り合わせてからは、テイ湖の側の沿道で大麦とオート麦を目にする〔そのままケンモアまで下っていく〕。

ケンモアで、翌朝お茶と朝食を共にするため、大部屋をケネディー夫妻と分け合い、就床。

ケンモアの地主は水不足について、それがこの地に家畜価格の下落と過剰人口 (overpopulation) をもたらすものと憂慮している。年間15もしくは20ポンドの山ほどの小農場、それに山腹にある家畜用の牧草地。大きな羊農場は見当たらない。以上ことはウェストワードについて一層言える。

アベルフェルディで食事を取る。現在建設中の橋のために採石場で働いている労働者は食事の支給なしで、20、または22シリング稼いでいる。2エーカーと小屋に対する地代は一般に8ポンドであるが、土質は明らかに異なっている。

ダンケルドから1マイルのインバーにあるインに到着。夕暮れ時に、テイ川近くまで散策。

7月11日

〔マルサスによる記載はない、以下はハリエッタ夫人の記述からの抄出〕。〔一行は残らずテイマス城に出掛けた。金色の階段、図書室、衣装室、最後に最高級の扉、いずれも見事である。大雨に会い、ずぶ濡れで2輪2頭馬車（およそ、御者には1日あたり1.15ポンドを、また1頭の馬には5シリングを支払っていた）へ。アベルフェルディに着くと、天候回復。老婦人の案内でモウネズの滝へ。谷間は妙に狭隘で、下部では水は全然滴っていなかった。登っていくと、天辺にある水車は水を下へと降ろしていて、夏場の水量としては十分であった。別な滝まで近道で歩行。ディナー後に、ダンケルドから1マイルのインバーへ。アトール公（John Murray, 4th duke of Atholl, 1755-1830）のカラ松での徒歩でインに近づく。テイ川の土手に沿って逍遙、モミの木々の丘、インバーに安着。〕

7月12日（水曜日）

ダンケルドでケネディー夫妻と朝食。〔第2〕アトール侯爵に所縁のダンケルドにある敷地、大聖堂、教会、カラ松。〔タイ川の〕川辺での遊歩。アメリカ式庭園。フェリー。〔スコットランド原野を踏み越えて〕隠れ家へ。オシアン鏡の殿堂（Osian Fall or Hall）。隠れ家に通じる丘からの眺め。案内人などいなくとも、インバー見物の大半はなしえる。ダンケルドでケネディー夫妻と食事。入り相になり、パースへ。ケネディー氏からの報では、〔スコットランド南西部にある〕エア郡（Ayrshire）の労働者はいま現在週に6～9シリング稼いでいる。その平均は食事なしでほぼ7シリングである。労働価格はアイルランド人の流入で大いに影響を受けた^[18]。〔インバー付近まで戻り、ダンケルドで食事をした後に〕パースの町へ。タイ川。丘。広場。

7月13日（木曜日）

〔朝食後、タイ川に沿って歩いていくと、町の庁舎として建造された建物に感心、とりわけその屋根付きの玄関は古代ギリシャ風の円柱に支えられている〕まずは、キンロスに向かう。背にパースの偉観。穀物類は大病に陥っている。

アーン川。新しい橋。天然鉱水。〔相応なファーク峡谷を通って〕ロック・レヴェン〔この地は草木がない低地で、レヴェン川の川原部や中洲の島々からなっている〕

へ。キンロス。ノース・キーンズ・フェリー〔ここで、手荷物の移動を馱馬に委託〕。〔船内のインの上にある快いテラスからの〕エディンバラとフォース港の千姿万態。サウス・キーンズ・フェリー〔4輪2頭馬車共々、蒸気船に乗船した〕。西側の山々。〔午後2時頃に〕クレグ・クルーク邸へ。

7月14日（金曜日）

〔クレグ・クルーク邸に寄寓、在宅。〕エディンバラへ向かう道すがらでは大麦が収穫中。見事な成育（cultivation）である。ジェフリー氏はさや1杯の小麦とさや1杯の大麦のために1エーカー3.15ポンドで隣に農地（farm）を借りている。水不足こそないものの、辛苦が絶えないようである。〔夕暮れに、散歩して、フォース、城郭、街並み、旧火山であったアーサーの玉座等の風景を楽しむ。〕

7月15日（土曜日）

〔朝食後、ジェフリー氏と共に、エディンバラの〕法廷へ。ジェフリー氏の卓越した弁舌とそれへのコーバン氏の反駁を拝聴。それは、アレキサンダー教授（Professor of Alexander）がセント・アンドリュース大学におけるギリシャ語の講義での不服従に関して起こした訴訟である¹¹。〔夜には、クレグ・クルーク邸にて、ジェフリー氏やコーバン氏らと歓談しながらの食事〕

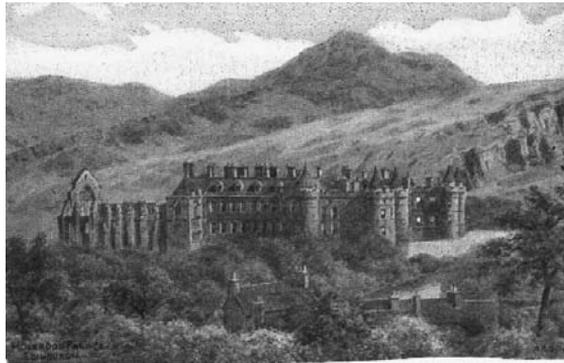
7月16日（日曜日）

〔遅めの朝食の後、黄昏になり、エディンバラへ〕〔スコットランドの説教者として名高く、全18巻の『エディンバラ百科事典』（1808-30年）に「ユークリッド」、「地理学」、及び「気象学」といった項目を寄稿した〕ゴードン（Robert Gordon, 1786-1853）博士〔によるカルヴァン派の説法に触れるために〕。〔しかしその説法は勤勉ではあったけれども、博士自身の自己保身のためか、胸を打つものではなかった〕〔その後、ラザフォード夫妻も交えて、クレグ・クルーク邸でディナー〕

7月17日

〔マレー夫婦との食事の約束のため早目にエディンバラへ〕〔1818年には、『朝鮮半島西海岸及び日本海上大琉球探検航海記』を刊行していた〕英国海軍大佐バジル・ホール（Captain Basil Hall, 1788-1844）。〔ホールの弟で、芸術家の後援者であった〕ホール（James Hall）氏。アーサーの玉座〔それから、ホリールード宮殿〕〔図25. 参照〕へ。室内装飾人のトロッター夫人。エディンバラ市長〔家具製造販売会社の代表でもあったトロッター（William Trotter, 1772-1833）が1825-27年の市長〕。テーブル。飾り棚。奇妙な楡。カールトン・ヒルの内部を黒く塗って光を遮断した小部屋（Camera Obscura）。ネイスミス（Alexander Namyth, 1758-1840）氏の絵画。蒸気機関の模型。聖書朗読台。高圧原動機用の安全装置の発明。〔モレイ（Moray）

図25. ホリールド宮殿



(注) 記者所有の古絵葉書より。

図26. 1824年のコルストルフィンからみたエディンバラ



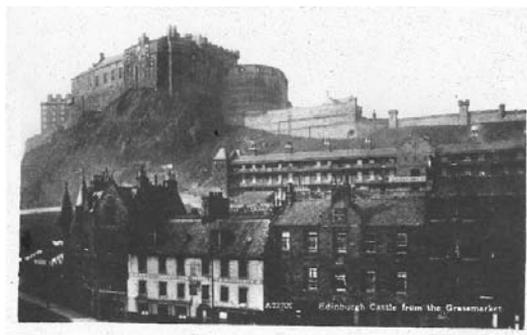
(注) https://en.wikipedia.org/wiki/Corstorphine_Hill より。

地区のグレート・ステュアート街にあったマレー宅を訪問し、そこでマレー夫妻と会食、その席にはバジル・ホール氏、マカロク氏、〔エディンバラ王立協会の会員で、法律に精通していた〕フラートン (John Fullarton, 1775-1853) 氏らも同席、10時半にはクレグ・クルーク邸に戻る]

7月18日

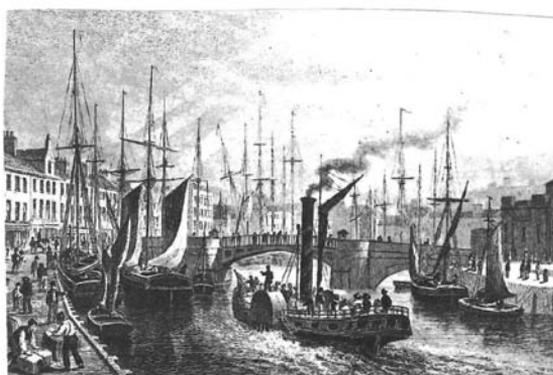
コルストルフィン (Costolphen or Corstorphine) の村落 [図26.参照] へ。〔エディンバラ王立協会の会員で、セント・ポールズの司祭長であった〕モアヘッド (Robert Morehead, 1777-1842) 氏 [を訪ね、丘を越えて、クレグ・クルーク邸に戻り、来訪してくれたマレー夫妻と会い、薄暮には、エディンバラの南部に住み、スコットランド土着の文化を墨守し、妻がカトリックへと改宗していたブーチャン伯爵 (Henry Erskin, 12th Earl of Buchan, 1783-1857) 夫妻の来臨に対応]。

図27. グラス・マーケットとエディンバラ城



(注) 訳者所有の古絵葉書より。

図28. リース港 (1820年)



(注) A.J. Youngson, *op. cit.*, p.259より。

7月19日

ウォータールー・ホテル。城郭。グラス・マーケット〔エディンバラ城のすぐ下〕〔図27.を参照〕。リース〔北部の港〕〔図28.参照〕。ニューヘーブン〔リースにほど近い〕。〔暮れ方に、雨の中、ゴードン夫人とその小さな娘によるクレグ・クルーク邸への来駕〕

7月20日

〔終日、ほぼ雨、ディナーの後に、クレグ・クルーク邸とエディンバラへ別れを告げる〕セルカークへ。〔トルサンスにあるインを通過して、〕ツイード川の低地と川岸部。ツイードとエトリックを横切る。〔セルカークで就眠〕

7月21日

ペンリスへ。〔朝食前に出発、持病を抱えている21歳の息子ヘンリーの体調も朝食後には良くなる〕

ホーウィックとモスポール・インとの間にあるテビオット川の源流。同じ源流からは別な流れが反対方向に走っていて、〔ノースヨーク州の〕エスク川に合流している。〔狭く、険しい山道を〕新緑なる山々。焼き焦げた跡は見られない〔、しかしぞっとするような剥き出しの絶壁に遭遇〕。ランゴルムに入るも、ほぼ同類の地方である。ランゴルムからロング・タウンへ。〔非常に美しい〕エスク川の低地。〔雨が降り頻る中、ペンリスに至る〕

原注

1. 法廷弁護士 (Advocate) 図書館は現在ではスコットランド国立図書館になっている。なお、ワーズワース (Sir William Wordsworth, 1770-1850) によれば、この図書館は作家向けで、とても荘厳ではあるけれども、学者用というよりは休息や舞踏会の場に近いと称している〔Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, p.254〕。
2. マルサスは「大学 (University)」に訂正線を引き、「カレッジ」と書き直している。というのもエディンバラ大学は1582年に町の評議会の手で「町のカレッジ」として創立されたからである。ジェームズVI世 (Charles James Stuart, 1566-1625) が後援者になった時に国王ジェームズのカレッジとなった。1789年にロバート・アダム (Robert Adam, 1728-1792) が建物を設計し、1827年に完成した。
3. カルトン・ヒルに立っている国定記念物の建造はマルサスが訪問する4年前から始まっていた。イベリア半島戦争 (1807-1814年) やウォータールーの戦い (1815年) を追悼するべくパルテノン神殿を模造しようと企画された。12本の支柱が立てられた際、その建築費は各々千ポンドを費やした。
4. クレーグ・クルーク城は「その明媚な位置がコルストルフィン・ヒルの下部にあり」、フランシス・ジェフリーは1815年に所有し、1850年に亡くなるまで手放さなかった。彼がこれを接收した時には、「荒れ放題の家庭菜園付きの古いとりで (keep)」であったけれども、喜んで改善を施した。
5. ちなみに、マルサスの一行は急な勾配な山道では、4頭立て2輪馬車に編成して、難所を乗り切ろうとしていたと推される〔J.M.Pullen & T.H.Parry ed., *op.cit.*, p.240〕。なお、1820年代、1頭の馬の値段は25~50ポンドであり〔ダニエル・プール著片岡信訳『19世紀のロンドンはどこまで賑わったのだろうか』(青土社、1997年) 203頁〕、4頭立て2輪馬車を購入、維持するには巨額の出費を要した〔本城靖久著『馬車の文化史』(講談社、1993年) 226-7頁〕。
6. 「新アカデミー」とはレオナルド・ホーナーやヘンリー・コーバンといったウィッグ派の人々によって1823年に設立されたエディンバラ・アカデミーのことであった。
7. コメット号 (The Comet) は1812年にヘンリー・ベル (Henry Bell, 1767-1830) によって〔グラスゴー港で造船され、〕クライド川で進水され、〔グラスゴーとグリーノック間を航行する〕ヨーロッパで最初の実用的な旅客蒸気船となった。〔しかし1825年10月に沈没した。〕なお、コメット号とベルの詳細については、上野喜一郎著『船の歴史 第3巻』(天然社、1958年) 97-8頁や、田中航著『蒸気船』(毎日新聞社、1977年) 66-9頁をも参照。

8. ここでの湖とはカトリーヌ湖のことである。ヘレンズ島とは普通には「エレン島」と呼ばれている。エレン・ダグラス (Ellen Douglas, 1921-2012) 以降は「湖の婦人」と称されている。スコットの詩は1810年刊ではあるけれども、そこには、7月8日土曜日に、「船頭に、3シリング」と記してある。
9. ロッキー川とはドチャート川のこと。またマクナブ〔部族〕の埋葬地はその橋付近にある2つの孤立した丘よりも低い所にある。その丘は多分ストロナッハラハラ(高さ1708フィート)であったであろう。「1時間でわけなく降りてこれる」、頂きでは、「周辺地方の美しさがよく看取できる」。
10. ケネディー夫妻とはトーマス・フランシス (Thomas Francis, 1788-1879) と彼の妻ソフィアのことである。2人は6年前に結婚していた。ソフィアはサミュエル・ロミリー卿 (Sir Samuel Romilly, 1757-1818) の1人娘であり、また彼女の弟ジョン (John, 1802-74) は1833年にオッター (William Otter, 1768-1840) の娘キャサリンを娶っていた。トーマス・ケネディーは1834年に政界から身を引くまで、1818年からバーク選挙区から選出の下院議員であった。「それは彼が父の借金に対する債務を自ら引き受け、その際に過大に見積もったせいで、財政的窮状に陥ったためである」。1人の確たるウィッグ派として、ケネディーは主教による法的無能力の撤廃、選挙権の拡大、救貧法の改革、穀物関税の引き下げに奔走した。また彼は排水設備 (sanitation) や牧畜にも、ひいてはエアシャーの地所での農業に科学を適用することにも関心を寄せていた。
11. 1826年7月19日のスコッツマン紙はアレキサンダー教授の名誉棄損の訴訟に関して事細かく報じている。教授は、出版者のアレキサンダー・マクドナルドが1825年3月24日に公表した1記事に対して千ポンドの損害賠償を請求した。その記事には、「ギリシャ語の上級クラスは不服従状態となった。担当教授は受講生を掌握できず、混沌状態に陥っていたようである。」とある。この混乱の原因は、教授がなしたある教区牧師の選定を巡ってであった。
- ジェフリー氏はマクドナルドを擁護して、次のように弁じた。学生達が講義中に歌を斉唱した、教授の方は涙を流し、同時にその職を辞するよう恫喝された。むろん、このこと自体は教授がその職務に適していないことを意味はしない。とはいえ、教授が「1地方紙の微細で、たまたまの小記事」に対して損害補償を求めるのは品位を落とすもの以外の何物でもない。
- それに対して、コーバン氏はアレキサンダー教授を弁護して、その記事は教授の評判を傷つけた、また当講義はあくまで若者達の受講であり、その両親達は子供達を秩序を保てる人に預けることを願ってやまなかったと陪審団に訴えた。
- それからほんの50分後に、陪審団は満場一致で、マクドナルドに対して50ポンドの賠償支払いを命じた。マルサスの一行は法廷でこの公判の一部始終を傍聴していた次第である [P.James ed., *op. cit.*, pp.266-7]。

訳注

- [1] 非国教徒である神秘主義的ピューリタンのクエイカー派は18世紀において、「信者数を約6万人から1万5千人と4分の1に減少させ」る一方で、結婚を通して血族集団化していった。正直、慎重、簡素といった徳目を尊び、定価小売販売を信条としていた〔山本通著『禁欲と改善』(晃洋書房、2017年) 132、155-8、172-3頁〕。

- [2] 「英国ではふつう、国教会とカトリックの教会建築物を Church、非国教徒の教会建築物を Chapelと呼んで、両者を区別する」と解説されている〔梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済』（同文館、1996年）180頁註1〕。
- [3] 18世紀の後半、地主達は10時頃に朝食を取っていた、またディナー（正餐）を午後の3時半～5時頃に楽しんでいた〔ダニエル・プール前掲訳書115頁、並びにV.T.J.アークル著松村昌家ほか訳『イギリスの社会と文化200年の歩み』（英宝社、2002年）126頁や安達まみ・中川僚子編著『〈食〉で読むイギリス小説』（ミネルヴァ書房、2004年）53頁も参照〕。しかしディナー時間の方は19世紀前半に入り少しずつ遅くなっていき、1840年代における正午のお茶の流行がこれに拍車をかけ、1850年代には午後7時半以降へと推移していた〔プール前掲訳書421頁、及びアークル前掲訳書173-4頁〕。
- [4] マルサスがエディンバラで最初に出会った1人にL.ホーナーがいたことが重要である。なんとすれば、この弟ホーナーこそが紛れもなく若きダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809-82）とマルサスとの間に介在した人物に他ならなかったからである〔柳田芳伸・姫野順一編著『知的源泉としてのマルサス人口論』（昭和堂、2019年）11-2頁〕。
- [5] その際の明かりは、おそらくは、持続時間が11時間である蜜蠟ロウソクを用いたものであったであろう〔クリスティーン・ヒューズ著松村靖夫訳『十九世紀イギリスの日常生活』（松柏社1999年）3-5頁〕。
- [6] マカロクのマルサス批評に関しては、松井名津「J. R.マカロクとマルサス人口原理—成長と貧困」飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社、2006年）所収を参照。
- [7] 当時のイギリスの沿岸旅客蒸気船航路の実相に関しては、さしあたり、フィリップ・S・バクウェル、ピーター・ライス著梶本元信訳『イギリスの交通』（大学教育出版、2004年）44-7頁を参照。
- [8] マルサスとチャーマーズとの知的交流については、さしあたっては、真鍋智嗣「救貧法をめぐるマルサスとチャーマーズ」柳田芳伸・山崎好裕編著『マルサス書簡のなかの知的交流』（昭和堂、2016年）所収を参照。
- [9] もとより、マルサス夫妻はニュー・ラナークの木綿工場の全景に熱い視線を送ったことであろう。しかし周知のように、マルサスはオウエン（Robert Owen, 1771-1858）の『新社会観』（1813-4年）等に対して異見を抱いていた。オウエンは、このことを、「マルサス氏とは頻繁に議論したものだが、（で私の印象では、どうも彼は彼があれほど巧妙に主張した諸原理の真実性をついには甚だしく疑い出してきたようだった。）その議論の際、マルサス夫人がいつも私の方の論に与して、私の論を擁護したのは一種異様な出来事であった。」と回顧している〔ロバート・オウエン著五島茂訳『オウエン自叙伝』（岩波書店、1961年）191頁〕。ちなみに、オウエンがマルサス宅で夕食を愉しんだのは1821年8月12日（日曜日）のことである〔Patricia James, *Population Malthus* (London: Routledge & Kegan Paul, 1979), p.377〕。
- [10] マルサス家の人達は1817年の夏にグラスゴー経由でアイルランド旅行を謳歌していた。その際、ハリエッタ夫人の妹キャサリンの嫁ぎ先であるキルカンの地に立ち寄り、さらにはキラニー湖まで足を伸ばしている〔拙稿「下院委員会におけるマルサスの2証言」『長崎県立大学論集』（長崎県立大学学術研究会、2000年）81-2頁〕。
- [11] 当時の概況については、武藤博己著『イギリス道路行政史』（東京大学出版会、1995年）

- 68-142頁を参照、また、スコットランドの状況の一端に関しては、同書172頁註1や、T.C.バーカー、C.I.サヴィジ著大久保哲夫訳『英国交通経済史』（泉文堂、1978年）55-6頁を参看。なお、馬車の最高速度はせいぜい平均11マイル程度であった〔プール前掲訳書203頁〕。
- [12] リンネル産業の材料であった亜麻は脱穀用や穀物用の袋に、あるいは衣服に使用された。また、粉碎され牧草等と混ぜて家畜の飼料に用いられた。さらに亜麻の種子は灯火用の油としても利用されていた〔スリッヘル・ファン・バート著速水融訳『西ヨーロッパ農業発達史』（日本評論社、1969年343-4頁）、及びジェームス・ケアド著佐藤俊夫訳『イギリス農業1850-51年』（今井書店、2011年）222、295、345、367、384頁、414-5頁注、また竹田泉著『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命』（ミネルヴァ書房、2013年）152-9頁も参照〕。
- [13] ちなみに、ロジアンLochiansの熟練農業労働者は1820年代においても現物賃金として「オートミール、大麦、エンドウ豆を、それぞれさや10杯、3杯、2杯程度」を支給されていた〔T.C.スマウト著木村正俊監訳『スコットランド国民の歴史』（原書房、2010年）309頁〕。
- [14] 「馬は1日に25マイルから50マイル走ることができた」が、通常、その走行距離はせいぜい18キロ程であった〔プール前掲訳書203頁や、本城『馬車の文化史』223頁を参照〕。それゆえ、1～2時間の道程毎に宿駅があり、馬を取り換えていた〔本城同上書152頁〕。
- [15] 「一八二五年の経済不況の中で数多くのイングランド諸銀行が『無限責任』ゆえに倒産したのに対し、スコットランドの諸銀行は『合本資本制』・『有限責任』ゆえにもちこたえることができた」と略説されている〔北政己著『近代スコットランド社会経済史』（同文館、1985年）231頁、及び同著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』（藤原書店、2003年）234頁〕。また、当時のグラスゴーでは、力織機（power loom）の急速な普及や自動式ミュールの導入が不熟練労働者の賃金を低落させいき、「長期にわたる激しいストライキ」が発生していた〔『近代スコットランド社会経済史』87-8頁、W.ファルガスン著飯島啓二訳『近代スコットランドの成立』（未来社、1987年）277頁、及びT.C.スマウト著木村正俊監訳『スコットランド国民の歴史』（原書房、2010年）409-11、425-6頁〕。
- [16] マルサスの救貧法に対する当時の姿勢は「理想としての救貧法廃止の考えを持ち続けており、現実的な運用の改善を主張」するというものであった〔柳田・山崎編前掲書155頁〕。ステュアートの方もマルサスが救貧法の漸次的撤廃案に関心を抱くものの、実際には救貧法の修正を説くに至っていた〔荒井智行著『スコットランド経済学の再生』（昭和堂、2016年）172-4頁〕。また、年貢和解金（現金納）へと転化しつつあった十分の一税が全農地の半分程度からしか徴取できていなかった実態については、柳田・山崎編前掲書101-2頁、及び110頁注40を参照。さらに新圃い込み耕地の割譲による十分の一税の納税に関しては、重富公生著『イギリス議会エンクロージャー研究』（勁草書房、1999年）177-83頁を参看。
- [17] プロテスタントでは「礼典」とも訳されるが、「その理解は決して一様ではない」、さしあたり、リチャード・D・オールティック著栗田圭治ほか訳『ヴィクトリア朝の人と思想』（音羽書房、1973年）412頁註22を参照。
- [18] アイルランドからの季節移民は1822年の飢饉を契機に拍車がかかり、「1820年代には年6,000人から8,000人のアイルランド人が」スコットランドに渡り、収穫作業等に従事した。ダンケルドのあったパース郡（Perthshire）にも押し寄せ、高地人収穫労働者を駆逐していた〔斎藤英理「19世紀のアイルランドにおける貧困と移民」『三田学会雑誌』78巻3号（慶応義塾経済学会、1985年）77-9頁〕。

マルサスの経済学覚書（1810年）

凡例

1. 訳出に際しては、原文中のdash（—）は基本的に省略し、前後を関連付けながら進めた。
2. テキストの原文〔Patricia James., *The Travel Diaries of T.R.Malthus*, pp.222-25〕に付されている多数の注記については、訳者の判断に基づき、必要最少に絞って、通し番号に変換し、訳載している。なお、紙幅の関係上、削除した原註に関しては、訳者が適宜に亀甲で括った補記部において、これらを反映させるよう努めた。
3. 訳者による注記は亀甲内数字の通し番号で示した。

マルサスの経済メモ（1810年）

オッター^[1]（William Otter, 1768-1840）氏から伝聞したところでは、家畜の卸売り業者達^[2]はその広範囲からの情報のお陰で、様々な定期市での家畜価格の極僅かな変動をも耳にしている。これらのことは日常茶飯事で、このことにそって売買に心を砕いている。つまり、彼らは安い所で買い、それを殆ど間を置かずには多少離れた高い所で売り捌くのである。

この類に倣えば、おそらく、通貨の水準は非常に正確に保持されるであろう。つまり、その地区（district）が〔通貨〕流通の過剰状態に陥らないよう何れかの地方銀行によって守られている^[3]のである。例えば、リンカン州の地区が紙幣（note）で溢れ返れば、その結果、物価はほんの僅かばかりを上昇を味わうであろう。また家畜や他の商品は近隣の地区にあるリンカン州の紙幣で購入されるであろう。その際、こうした紙幣は他の銀行によって受け取られ、ほどなくイングランド銀行券と交換するために送付され、その末に、リンカン州の紙幣の流通は適切な水準まで引き下げられるであろう。

通例であるなら、近隣の地域の銀行家達は行員達（clerks）に週に1度、ないしはそれより頻繁に手持ちの紙幣を相互に交換し合うために送付させる。一般的に言って、おそらく、双方の収支はほぼ均等である。しかし仮にある銀行が準備金よ

りもずっと多い量 (proportion) を発行したとするなら、もちろんその銀行家はより多くの枚数のイングランド銀行券を支払わねばならないであろう^[4]。かくして、銀行家はすぐさまその発行紙幣を回収せねばならず、一文の利益をも手にできないであろう。

いま、コベント・ガーデンに新築する^[5]ための木材の最後の荷がグラスゴーで購入されたでしょう。これに伴い、それがどれほど早く持ち込まれるのか、それゆえどれほどの距離であるのか、公平なたまたまの低価格が継続するとどんな影響を及ぼすのか、こうした別な証明 (proof) が求められよう。

概して、ノーサンバーランド〔マーペスを州都としたイングランドの最北東部の州〕では、作男達 (Hinds) や無給の奉公人達 (bond servants) は1年にさや2杯分のライ麦と、同量のえんどう豆、大麦、及びオート麦の各々とを手にし、それに1頭か2頭かの牝牛を飼育している、加えて現金で約5ギニー半〔約5.75ポンド〕を獲得している。第2代グレイ伯爵チャールズ・グレイ (Charles Grey, 2nd Earl Grey, 1764-1845)。

おおよそ、ノーサンバーランドの農業者達 (farmers) は利潤として地代の3/4も懐にはしていない^[6]。にもかかわらず、所得税には大いに心を痛めている。借地契約を更新していく度毎に、通常には、借地人達の手で所得税の負担分が算出され、顛末として専ら地主の肩に降りかかっている。

上記の事は、この2,3年については、地代の高騰への微弱な牽制 (check) になっていた。

エディンバラで耳にした所では、ロージアン〔エディンバラ周辺のスコットランドの低地地方〕の農業者達による総農業利潤が投じられた資本の5パーセントを上回ることは滅多にない。

これは信じ難いほど低いように思える^[8]。

スコットランドの耕作人が成就した改善の殆どは改良されていく資本や借地人達の熟練によるものであり、地主達の資本からのものではない。

スコットランドの借地人達は地代の半分に課された所得税を支払っている。しかしこれは利潤を超過している分についてであり、所得税によって抑さえられているとは思えない。

エディンバラ周辺部の労賃 (Labour) は夏季の間はずっと1日あたり半クラウン〔2.5シリング〕と2シリング〔それゆえ、計4.5シリング〕であり、冬季では、大

体が20ペンスほどで、2シリングの時もある。

ラナークでは^[9]、賃金はとても低くて、20ペンスが通常の価格のようである。綿工場には、約千五百人が雇用されている。でも、そこでは放蕩（*debauchery*）が瀰漫している。就業時間は朝の6時から夕方7時までである。かつ、この村には良好な学校が設置されてもいる。けれども紡績工達の方は学校に出席する暇（*leisure*）をたっぷりとはもっていない。1日の仕事を終えると、紡績工達が何らかのリクレーションを求めてもやむない。それゆえ、日曜日が読書に大いに関心を寄せうる唯一の日と当て込まれている。

あらゆる仕事は出来高制（*by the piece*）で果されている。また徒弟¹は今のところ使用されていない。

ラナーク出身の多数の子供達が雇われているわけではない、また他の所からは誰も雇い入れられてはいない。

スペインとの取引が衰微する前から、貿易に対する大障壁（*check*）は気付かれてはいた。にもかかわらず、沢山の人が一括して、下落した値²で雇用された。各家族は1人の外科医に年間1人あたり1シリングを預託した³。その預託金で、外科医は人々のあらゆる病気を治癒できるよう努めた。子供達も健康ではあったけれども、冬場には病気がちであった。

ラナークでは、救貧税は一切徴収されていない。ラナークに属している工場で働いている人（*person*）である限り、教会の義援金からも何某かを受け取ってはいたであろうけれども、それは極めて儉しいものであったであろう。

工場主は工場に隣接した8エーカーという一区画の土地を年間120ポンドで借り受けた。そこは施肥され、かつ適切に整えられ、それから工場に雇用された各々の家族に小さな畑地（*patches*）にして貸与されて、じゃがいもが植え付けられた。こうした方法でもって、オウエン（*Robert Owen, 1771-1858*）氏は途方もないことであるけれども、それが地代を上回るものを生み出すと想定している。

エディンバラの教区の1つは、貧民や救貧院（*poor house*）に対して穏当な評価を下している。そこは救済を求める人達にとっては脅威以外の何物でもない。救貧院においては、いかなる動物性食物も許されない。また餓死こそが避難場とさえ考えられている。こうした評価が周知徹底されている所では、まさに貧民の被救済権は思い浮かべられてはいない^[7]。

〔食料の〕不足時には、救貧税は1ポンドあたり1シリング6ペンスの割合で算出されていたけれども、いまでは再び4ペンスまでに引き下げられている。

H. モンクリフ卿⁴

恩給生活者達は労役院 (work house) に行くように指示され、減っていった。その結果、わずかに9人の老人の申し出が受理されたにすぎない。

たとえ何らかのものがかなり廉価であったとしても、グラスゴーでの労働の価格についてはほぼエディンバラと同一である。ペイズリーでの織工達は主に手の込んだ模様に携わっていて、グラスゴーでよりも多くを稼ぎ出している。

最高度に熟練した織工達は時として1日あたり4または5シリングを稼ぎうるけれども、グラスゴーでの平均稼得は10シリングには達せず、ましてやペイズリーでの12シリング越えには及んでいない。

どうやら、北部英国でもこの線 (mark) を越えてはいない。

ある織工は通常の熟練しか身に付けておらず、休みなく働いたとしても、1日あたり2シリングを稼ぎ出すには朝の6時から夜の9時まで精を出せねばならない。

多数の織工達が独身男子で、かつまた放蕩に陥っている。これは織工、刺繍工、及び親方製造業者の間でも瀰漫している。中絶 (Abor) という手段^[10]は絶えることがない。

蒸気を利用した機織りもうまくいってはいないようである。というのも、依然として1人の人が個々の織機に必要とされているからである。

商取引 (trade) に関連した先の点検においても、その値が激減しているにもかかわらず、依然として織工達は雇用され続けていた。

これらの時期 (seasons) には、資本家達は沢山の在庫を抱えるけれども、需要が回復してくると異常な利潤を達成する。低価格であっても、織工達は以前と同じ暮らしをしようとより一層懸命に出精する。

ローモンド湖周辺の労賃は食事なしで1日あたり2シリング6ペンスである。また食事付きでは20ペンス、あるいは2シリングである。

ステュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) がほぼ一年中雇っている老兵士では、1日あたり20ペンスと食事とが支払われている。

アロカーでも労賃は大体同じである。インヴェラリでは、およそ2シリング。年間の大半を雇用されているデュークの人達の場合には、小屋が与えられ、しかも1頭あたり14ペンスないしは16ペンス以下で牝牛を飼育している。

ダルマリーでは、年収の半分を占めている夏季の労働価格は1日あたり2シリン

グである。

原注

1. 「徒弟 (apprentices)」という語で、マルサスは、救貧法担当者の手で工場へと送致され、雇用者によって破屋 (barracks) に収容される孤児の被救済民 (pauper) を表示していたであろう。ロバート・オウエン (Robert Owen, 1771-1858) はニュー・ラナークで管理者に就き、一刻でも早くこの慣行を打ち破ろうとした。
今日では「急進的」と称されている学校は1816年に設けられ、1歳以上の子供達に給された。
2. 「スペインとの取引が衰微する」という語法を通して、マルサスは1808～12年の半島戦争のことを示そうとした。1806年に、アメリカ産綿花の輸出が停止された。けれども、ロバート・オウエンは7千ポンド余りを費やし、就業者達 (workers) に十分な賃金を与え続けた。こうして、就業者達は4ヶ月もなすべき仕事がなかったのに、その間も、「機会の整備を怠らず、良好な就業状態を保持する」以上のものをなしていた。
3. 外科医に関する説明では、ロバート・オウエンの息子であるロバート・デール・オウエン (Robert Dale Owen, 1801-77) による自叙伝の記述と全然一致しない。デールの記載では、1801年の11月生まれで、多分9歳の時に、「ある若者と一緒に狩猟旅に出かけた。その若者はニュー・ラナーク会社から給与をもらい、この村の外科医として無償で病人の治療を施した」とある。
4. ヘンリー・モンクリフ卿 (Sir Henry Moncreiff, Bart, D.D., 1750-1827) はその慈悲で名高いエディンバラの聖職者であった。このゆえに、彼はエディンバラの貧民に関する情報をマルサスに提供してくれていたと安んじて言えるのである。

訳注

- [1] オッターについては、マルサス学会編『マルサス人口論事典』（昭和堂、2016年）273頁を参照。
- [2] 肉屋の卸売商の一斑は、友松憲彦著『近代イギリス労働者と食品流通』（晃洋書房、1997年）75-9頁や、同著『近代イギリスの日用品流通』（晃洋書房、2016年）34-44頁を参照。
- [3] マルサスは既に2版『人口論』（1803年）の中で、「この多額の紙幣発行がイングランド銀行により行われるよりは、地方銀行により行われたのは、はるかに良いことである。」と述べている〔吉田秀夫譯『各版対照 マルサス人口論』（春秋社、1949年）Ⅲ121頁〕。
- [4] この点についても、マルサスは既に詳論しているであろう〔吉田同上訳書119-20頁〕。
- [5] コベント・ガーデン青物市場は1670年に開設されたけれども〔ラリー・ザッカーマン著関口篤訳『じゃがいもが世界を救った』（青土社、2003年）72頁〕、1808年9月30日に焼亡してしまい、その再建は翌年の9月18日から着手された〔Patricia James ed., *The Travel Diaries of T.R.Malthus* (Cambridge, Cambridge Univ. Press, 1966), p.220〕。なお、当時におけるコベント・ガーデンの市場（毎日）の拡大・施設改良は顕著で、かつ次第に青果物の卸売商の集まりへと変容し始めていた〔友松『近代イギリス労働者と食品流通』78頁〕。
- [6] ノーサンバーランドでは、基本的に、農地や農場の改良を借地農に委ねられていて、「農場を低地代で貸し出す方式」で運営され、かつ地代の「半分は貨幣で、残りの半分は毎年の

穀物価格に応じて」支払われていた。また、「農場は、すべて、年毎保有され、借地農間で、定期借地の希望はな」かった〔ジェームス・ケアド著佐藤俊夫訳『イギリス農業1850-51年』（今井書店、2011年）328、356-7、371頁〕。

- [7] マルサスは戦時下の利潤率を12パーセント前後と見積もっていた〔拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』（昭和堂、20005年）24頁〕。
- [8] 当時のスコットランドでは、基本的には、「貧困者の救済のための税は徴収せず、教会の入り口で集められた寄付をそれにあてていた」〔ロバート・H・ブレムナー著西尾祐吾ほか訳『社会福祉の歴史』（相川書房、2003年）118頁〕、その結果、「健常者は貧しくても自活するか、家族の寛大さに頼ることを余儀なくされた。高齢者、病人、未亡人および孤児に対しては、教会の献金からのわずかな補助が教会区でもめったに支給されない場合に、施しがあった。大きな町では施しはなかったし、できなかった。」と概説されている〔T.C.スマウト著木村正俊監訳『スコットランド国民の歴史』（原書房、2010年）398頁、また柳田芳伸・田中育久男「英米における救貧法の略史」『長崎県立大学論集』第52巻第3・4号（長崎県立大学学術研究会、2019年）69-70頁も参照〕。
- [9] 当時のニュー・ラナークにおける就学や就業の諸相については、さしあたり五島茂著『ロバート・オウエン』（家の光協会、1973年）172-7、187-200頁を参照。そこには、1819年の「週給平均は工具平均9シリング11ペンス、婦人工具6シリング、18歳以下下男4シリング3ペンス、女3シリング5ペンス。出来高払いの職人平均25~50パーセント高」と摘記してある〔北野大吉著『ロバート・オーウェン』（同文館、1927年）150頁、及び五島同上書191頁〕。
- [10] トーリー派の下院議員で、折り紙付きの保守主義者であったエレンバラ男爵（Baron Ellenborough, 1750-1818）が1803年に提出した包括的な子殺し法改正案により、墮胎禁止法の成立へと至った。これにより、墮胎薬の使用や物理的荒療治等を通して「受胎後4ヶ月以内に流産を起こそうと試みるものが犯罪行為と宣言された」〔アンガス・マクレン著萩野美穂訳『性の儀式：近世イギリスの産の風景』（人文書院、1989年）230頁〕。エレンバラ男爵の眼目は、続出する下層階級の未婚の母とは無関係であったけれども、結果として、「下層階級の生殖に対する新しい管理のための基盤となった」のである〔同訳書239、262-3頁〕。しかし、当時の「聖職者や法律家や医学者は墮胎を非難したが、ある程度までこの行為を大目にみ」てしまう風潮にあった〔同訳書206頁〕。こうした時勢にあって、2版『人口論』以降、マルサスは婚外の「ふしだらな性交（promiscuous intercourse）」に伴う墮胎を「犯罪的墮胎」〔同訳書248、251頁〕であると旗幟鮮明にしていた〔吉田秀夫前掲訳書I 24頁〕。なお、オウエンはニュー・ラナークにおける「男女のふしだらな性交」には罰金をもって厳然と対処し〔マーガレット・コール著新田貞章訳『ロバート・オウエン伝』（白桃書房、1974年）76頁〕、最終的には「自覚的覚醒」の発生、浸透により解消されていくと展望していた〔北野前掲書69-70頁〕。